

23-29 日に NAFTA 再交渉

- ◆英離脱交渉は通商協定控え「ソフト離脱」に期待集まる
- ◆英 12 月 CPI は伸び鈍化、インフレ鈍化の始まりかどうかの判断は時期尚早
- ◆加ドルは上値が重いか、23-29 日の第 6 回 NAFTA 再交渉が焦点

予想レンジ

ポンド円 149.50-155.50 円

加ドル円 87.50-91.50 円

1 月 22 日週の展望

英国と欧州連合 (EU) の離脱交渉にまつわる不透明感は続いているものの、足もとでは「ソフト離脱」への期待がくすぶっている。英国は 3 月 22-23 日の EU サミットで通商協定に関する概要を提出する見通しだ。メイ政権が希望する 2 年間の移行期間 (2021 年 3 月末まで) については、バルニエ英 EU 離脱・欧州委員会首席交渉官が示した 2020 年いっぱいまでで決着する公算が大きい。3 月のサミットを控え、メイ首相はまず保守党内で通商協議に関して大枠合意に達しなければならない。合意が後ずれすることになれば、メイ降ろし機軍が高まり、離脱交渉の不確実性への懸念で、ポンド売りが再び強まる可能性がある。

英経済の減速は今年も続く見通しだ。2017 年の実質成長率は+1.7%にとどまり、18 年は+1.3%まで低下することが予想されている。購買力の低下に伴う個人消費の低迷は今年も継続しそうだ。12 月の消費者物価指数 (CPI) は前年比+3.0%と市場予想と一致し、約 6 年ぶりの高水準となった 11 月の+3.1%からやや伸びが鈍化し、6 月以来の水準まで低下した。ポンド安の影響が薄れるに伴い、今後 CPI の伸びが鈍化するとの見方がある一方で、EU 離脱を控えポンドの一段高は見込めず、原油高も要因に CPI は高止まりするとの見方も強い。インフレ鈍化の始まりかどうかを判断するのは時期尚早か。来週は雇用指標や 10-12 月期国内総生産 (GDP) の発表が予定されている。実質所得の低迷は続く見通しで、イングランド中銀 (BOE) は追加利上げに対してはなお慎重なスタンスを維持しそうだ。

カナダ中銀 (BOC) の金融政策会合を通過し、加ドルは上値の重い動きか。BOC は今週、市場予想通りに政策金利を 1.25%に引き上げた。労働市場の引き締めりと物価上昇が BOC の予想を上回っていることを背景に、最近 7 カ月で 3 度目の利上げに踏み切った。BOC はインフレが目標に近く経済はほぼフル回転しているとし、2018 年の GDP とインフレ見通しを上方修正した。今後も追加利上げの余地はあるものの、北米自由貿易協定 (NAFTA) 再交渉の行方が最大のリスク要因と指摘した。

来週は 12 月の CPI が発表される予定だが、注目はやはり 23-29 日 (1 日延長) の第 6 回 NAFTA 再交渉。再交渉は難航が見込まれ、加ドルの圧迫要因となりそうだ。11 月の米中間選挙を控え、米国第一主義のトランプ大統領が NAFTA 離脱を表明する可能性は大きく残されている。同大統領は NAFTA 再交渉の最善の結果は協定の廃止だとの考えを示した。ただ、米国内では多くの議員のほか、農業や自動車などの業界団体が NAFTA 継続を訴えている。

1 月 15 日週の回顧

ポンドは堅調な動き。ドル売りが継続する中、「ソフト離脱」への期待感もポンド買いを後押しし、ポンドドルは 1.39 ドル台、ポンド円は 154 円台まで 2016 年 6 月国民投票以来の高値を更新した。加ドルは伸び悩み。BOC の追加利上げは織り込み済みで、NAFTA 再交渉への警戒感で、ドル／加ドルは 1.24 加ドル台、加ドル円は 89 円台を中心に小幅の上下にとどまった。(了)